

報告

日本福祉のまちづくり学会 第28回全国大会（小松）に参加して

渡邊 優樹

筑波大学 理工情報生命学術院システム情報工学研究群

1. はじめに

第28回日本福祉のまちづくり学会全国大会は、「SDGs 未来へ」をテーマに2025年9月26日から28日までの3日間、公立小松大学中央キャンパスにて開催された。本大会は福祉とまちづくりを融合させた持続可能な社会の実現を目指し、初日には自動運転バスの乗車体験と座談会が開催され、二日目以降は一般論文および特定課題研究の発表、討論、市民公開フォーラム、学会賞授与式、展示会、交流会などが実施された。筆者は最終日の一般論文発表に参加し、本稿ではその様子と感想について述べる。

2. 生活困窮者のペット多頭飼育崩壊とその支援について

筆者は生活困窮者のペット飼育支援に向けた多機関連携体制の構築に向けた調査の報告を行った。本調査は主に昨年度の卒業研究で取り組んだものである。多頭飼育崩壊とは多数の動物を飼育している飼い主が適切に管理できずに衛生環境等に深刻な悪影響を生じてしまう状況のことを指し、近年ではメディアの関心も高まっている。また、環境省や自治体の動物管理部局を中心に対策の必要性が認識され始めているが、このような事態の背景にあるのは飼い主の福祉の問題であることから動物の専門家だけでは対応が難しく、福祉職を始めとする多機関連携が訴えられている。筆者の研究では、この多機関連携を有効に機能させるための体制づくりについて

検討することを目的にケーススタディを行った。その結果、包括的な支援体制制度の活用により多頭飼育崩壊の根本的要因である飼い主の福祉課題の解決と福祉課題を抱えた人へのアウトリーチに繋がることが示された。

本学会は福祉やインクルーシブの理念を尊重していることから、発表要領においても特色が見られた。スライドの文字は24p以上の大きめのサイズとHGP創英角ゴシックUBが指定され、背景を黒、文字色を白とすることが推奨されていたほか、図表は各ページに1枚とするなど、視覚的に分かりやすい工夫が求められた。慣れない仕様ではあったが、作成してみると確かに見やすく感じられ、健常者にとっても伝わりやすい資料を作成するまでの学びとなった。

3. 発表と先生方からのコメント

発表に対して、日本福祉大学の岸先生からは多頭飼育崩壊の解決の基準や事例における介入後の経過、当事者の経験を予防に活用する方策についてご質問いただいた。また、座長を務められていた日本大学の植田先生からは重層支援体制整備事業の事例蓄積として多機関連携の経験が共有されることの重要性をコメントいただき、本研究の福祉全体における位置づけや発展可能性を確認する貴重な機会となった。

4. 他の論文発表を拝聴して

筆者が参加したセッションは主に「地域社会・生活支援」の分野に関連した発表でまとめられており、福祉事業所における高齢職員の労働環境に関する研究や、知的障害の当事者が運営する居場所がもたらす効果を明らかにした研究などが見られた。福祉の現場における支援者や利用者に対して定量的・

定的手法の別を問わず直接アプローチする研究が多く見られ、都市計画の領域とは異なる手法や対象に触れることで福祉の観点からまちづくりを捉える視点を得ることができた。

5. おわりに

今回の学会参加では、スケジュールの都合から研

究発表以外への出席は叶わなかったものの、視覚に配慮した発表スライドの規定や会場内の誘導等から、学会自体にも福祉の充実に向けた姿勢が感じられたのが印象的であった。都市計画・まちづくりを専門とする立場として、まちに暮らす一人ひとりの福祉の視点を忘れずに研究や仕事と向き合っていきたい。